

「中二病」からみた現代の子どもとは

D10-4009 佐藤 あみ
指導教員 朝倉 隆司

キーワード 中二病 思春期 キャラ 個性

1. 緒言

「中二病」という言葉は、ラジオ番組「伊集院光の UP'S 深夜の馬鹿力」において 1999 年に開始された「かかったかな?と思ったら中二病」というコーナーで初めて用いられた。本来は「(日本の教育制度の)中学 2 年生くらいの年齢にありがちなこと」を指していた。それが、インターネットの普及に伴いその言葉が広く知られるように連れて、意味合いが「思春期の少女が行う珍妙な言動」に変容していった。このような教育現場や子どもたちの間で起こっている現象や意味の変化の背後には、それぞれの時代や社会が求めている人間像や社会のあり方が存在している。すなわちここ数年で多く話題に上るようになった「中二病」もまた教育現場や子どもたちの人間関係、価値観、社会のあり方によって生み出されたものだと考えられる。そこで本研究は、「中二病」という言葉の意味や状態、なぜ「中二病」に罹るのか、などを検討し、「中二病」が現代社会において何を象徴しているのかを吟味していく。さらにそれをもとに現代の子どもの状況や問題の把握、子ども理解へとつなげていく。

2. 方法

本調査は「中二病」という言葉をよく理解している大学生 9 名を対象とし、予め作成されたインタビューガイドをもとに半構造化面接を行った。インタビューで語られた内容に基づき逐語録を作成し、分析テーマと関連の強い文脈に注目し、コードとして抽出した。コードについて類似する内容を集めサブカテゴリーとし、サブカテゴリー間の関連性からさらなるカテゴリーを生成し名称をつけた。

また文献やインターネット検索で得られた情報から、人間関係や「中二病」に関する内容を抽出し、分析した。

3. 結果と考察

まず「中二病」は、個人によって様々な見解を持たれている多義的な概念であり、反社会的行動に憧れを抱く「不良行動系」や V 系やゴスロリ服などに惹かれる「サブカルチャー傾倒系」、自分に特別な能力があると設定し、そのように振る舞いだす「非現実・妄想系」など 6 つのタイプに分けられる。また、「中二病」に罹る背景には憧れやストレスによる現実逃避などの中学生自身の心理的要因があり、同時に、「非現実・妄想系」にあるような一見突飛な行動をとることも多く、周囲から理解されにくい「中二病」行動を阻害されない周囲との人間関係など、環境の要因が関わっていることが考えられる。

「中二病」行動は思春期のテーマを達成するにあたり、理にかなっているものが多い。例えば「中二病」に罹る心理的要因〈憧れや同化〉や、前述した行動の分類データは、思春期に行われる自己同一性の確立の為、実在または想像する憧れ、理想的な人物を真似るという、自己同一視対象モデルと類似性がみられた。すなわち「中二病」はごく自然な思春期の行動特性である可能性が示唆された。そしてそれらが「病」とされることは、社会の価値観の多様化により、他者評価が絶対の基準になった現代で、人間関係の安定の為、常に自己を正当化し、「理解できないものを排除」しようとする傾向にある現代の子どもたちの人間関係の現状や、社会のあり方を象徴していると考えられる。

4. 結論

「中二病」と名づけられた言動は思春期における心性を反映した行動特性で、必ずしも異常な反応ではないことを念頭に置き、受け入れていく必要がある。そして、自己の人間関係のあり方もまた「異質なものを無意識に排除しようとする」偏ったものでないかを見直していくことが重要である。